教職課程センター紀要　第1号　111－118ページ，2016年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.1 111－118, Dec. 2016

総　　説

アカデミー版『カント全集』をめぐって

—来歴・近況・展望—*

A Report on the Present Situation of the Academy Edition of Kant's Writings

山根 雄一郎

Yuichiro YAMANE

Key words：カント，アカデミー版，新編集

はじめに

筆者が去る2014年度に研究滞在したマールブルク大学哲学科の，附置施設である「カント文書室（アルヒーフ）」は，ラインハルト・ブラント（Reinhard Brandt, 1937- ）とヴェルナー・シュタルク（Werner Stark, 1953- ）によって1982年に設立され，1987年以来，今世紀初頭に至るまで，いわゆるアカデミー版『カント全集（*Kant's gesammelte Schriften*）』の作業拠点として機能してきた[1]。本稿では，1900年にヴィルヘルム・ディルタイ（Wilhelm Dilthey, 1833-1911）の主導の下で刊行が始められて以来，すでに1世紀以上にわたり事業が継続されているアカデミー版『カント全集』をめぐって[2]，近年の公刊資料に基づき，その「新編集（Neuedition）」問題の動向も視野に入れながら，状況の整理を試みる。

Ⅰ　アカデミー版『カント全集』の軌跡

ブラントは，『哲学通報（*Information Philosophie*）』創刊40年にあたり2012年3・4合併号で組まれた「哲学の40年を回顧する」特集において，「カント」研究の現況を報告したその冒頭で，次のように記した。「『カント全集』の主たる版はベルリン学術アカデミー[3]のそれである（1900年に第10巻の刊行から始まり，続いて第1巻が1902年に出た。以下では巻数のみ挙げる）。この版は今や『自然地理学講義』（第26巻）の第2分冊の刊行によって完結するのを目前にしている（第1分冊はブラントの協力の下でシュタルクが作業して2009年に出た）。1997年には第25巻として，ブラントとシュタルクの編になる『人間学講義』が刊行された。2001年以来，ベルリン・アカデミーによって多くの巻の新版（Neuausgabe）が計画されている。1928年にエーリヒ・アディッケス〔後出〕が没して以後，『人間学講義』が編集されるに至るまで，アカデミー版はその学術的な安定を失ってしまったので，この理由ならびにその他の幾つかの理由から，修正を要するためである。」[4]

引き続きブラントは，「計画された新版が実現するかどうかは，現時点では未確定である」と述べた。その行方を後論で見るに先立ち，まずはこのような「新版」の必要性が認識されるに至った経緯について，ブラントによる参照指示に従い，アカデミー版『カント全集』とりわけ「三批判書が新編集される」ことを話題とした同誌2007年4号所載のタニャ・グロイナ（Tanja Gloyna, 当時，ベルリン＝ブランデンブルク学術アカデミー〔以下ではBBAWと略記〕にて三批判書新編集の相互調整と『純粋理性批判』新編集担当[5]，2014年現在『判断力批判』新編集班所属[6]）の談話記事[7]に即して概観する。

「ベルリン・アカデミーは，1894年に，ディルタイの肝煎りで「批判的かつ完全な」全集版〔の刊行〕を決定した」わけだが，グロイナによれば，「この完全性という観点は，今の場合，ディルタイの哲学的関心に由来しています。それによれば，一著作家の全言説が，記録保存され，一般に利用可能とされるべきなのです。このことは，〔当の言説の〕後代への伝達を確かなものとする[8]だけでなく，とりわけ，〔当の言説を〕理解する

営みに貢献するとされました。」グロイナの見るところ，ディルタイの考えでは，「全集版」のおかげで，「ある著作家を，彼の生活が一つ一つ現れた状態〔――個々の作品だけでなく書簡や備忘筆記といった自筆の記録類一般を指し得るか――〕で，また全体としても，彼が自分で理解した以上によく理解すること」が可能になる。そして，ディルタイの「関心事は，偉大な思想家たちの「発展史」と「体系」を認識可能にすることでした」とグロイナは言う。(IP, 46)

ディルタイにとって，カント哲学が整然たる「体系」として存在し，カントの「全言説」が若年期（いわゆる前批判期）から後年の主著群すなわち三批判書に向けて整合的な「発展史」を描く（べき）こと――これはそれ自身，事実問題でなく解釈問題であるはずだが――，このことは，個々のテキストの分析から結果する事柄なのではなく，むしろ，アカデミー版『カント全集』編纂の出発点を確固として規定する編集理念ともいうべきものであることが窺われる。この意味で，同全集は，これを「利用する研究者〔や翻訳者〕たちの解釈を，編者がそこで示唆した方向に誘導してしまいかねない」[9] 強いバイアスを最初から帯びている。次に触れられる全集の部門区分も，この点に留意して理解される必要がある。

「カントの諸言説の「原資料」は，事実に即した諸根拠に基づいて生じる部門区分に従って呈示されました。第1部門は著作（すなわち出版物）を，第2部門は往復書簡を，第3部門は手書き遺稿を，第4部門は筆記録に基づく講義を，それぞれ含むこととされました。[10]

各部門の当初の責任者は，W・ディルタイ（著作），ケーニヒスベルクの図書館員ルドルフ・ライッケ〔Rudolf Reicke, 1825-1905〕（往復書簡），エーリヒ・アディッケス〔Erich Adickes, 1866-1928〕（遺稿），マックス・ハインツェ〔Max Heinze, 1835-1909〕（講義）でした。このアカデミー版は，1900年に第2部門の第1巻〔通巻では第10巻〕から刊行が始まり，幾たびも増刷され，巻によっては改訂第2版が発行されています。改訂版が必要だったのは，新資料が発見されたかあるいは編集方針の観点から当該巻に手が加えられざるを得なかったためです。E・アディッケスが没した（1928年）ために第3部門の諸巻〔第14-23巻〕の刊行は遅れ，〔最初の3巻が1914年までに出たが，4巻目が1926年，次いで1942年までに計5巻が現れ，最後の10巻目が刊行された[11]〕1955年に至りました。手書き遺稿の相当な部分が，第二次世界大戦以降，失われたと考えられています。」(IP, 46)

引き続きグロイナは，「一巻目が刊行される前に諸事情から1920年に中止されていた第4部門」の推移に言及する。それによれば，同部門の計画は，ドイツが東西に分割された後の「1950年代に」，「〔東〕ベルリンのドイツ学術アカデミー」により再び取り上げられ，ゲアハルト・レーマン（Gerhard Lehmann, 1900-1987）にその編集が委託されたのであるが，1961年にベルリンの壁が構築されたことで制約されたため，〔西ドイツの〕ゲッティンゲン学術アカデミーが，ベルリン・アカデミーとの協議の上で事業を引き継いだ（IP, 46)。その後，「1987年以来」「第4部門を担当」するマールブルク[12]のブラントとシュタルク[13]による成果として『人間学講義』（第25巻）が刊行された「この〔アカデミー〕版〔『カント全集』〕（全29巻）は，W・シュタルクの編集する『自然地理学講義』（第26巻）でもって完結するのを今や目前にしています」(IP, 46）と，2007年にグロイナは見通していたのだったが，今や完結を目前にしているというこの観測は，本節冒頭に見たとおり，5年後に再び繰り返されることになった。（なお本節に出る人物の生没年は註1前掲シュタルク論文による。）

Ⅱ　新編集計画への動き

2007年のグロイナは，さらに，アカデミー版『カント全集』の編集総責任が「再びベルリン・アカデミーに置かれ」るに至り，「2002年以来，『カント全集』はBBAWの学術企画」となったことを，伝えている（IP, 46-48. この「学術企画」は2001年以来10年の期限付きで展開され，後出の「ツァイト財団」の支援も得た〔DZPh, 28〕)。グロイナによれば，「BBAWの学術企画の目標は，この間に“Editionswissenschaft”〔「編集文献学」[14]〕と研究が達成した水準で，『カント全集』を締め括ること」である。その例として，「『自然地理学講義』の初の編集版が，第1部門の最終巻〔である第9巻〕の或る部分に関係してもいる」事実をグロイナは挙げる。実のところ，第1部門（著作）の枠内での「編集に備えて1907年に用意された（〔実はカントの生前に弟子の〕イェッシェ〔がカントの手稿を編集した〕）『論理学』や（リンク〔が同様に編集した〕）『自然地理学』や『教育学』の本文は，カントによる出版物ではないから，それらは決してこの部門に位置づけられてはならないことは，1923年に第9巻が出版されたときには明白だった」のである（IP, 48)。この例は，一方では，カントの原資料のディルタイによる各部門への分類[10]が必ずしも一義的に安定したものでなかったことを，改め

て告げる。のみならず他方では，20世紀を通じて発達を遂げた「編集文献学」の技法と，哲学（史）及び関係諸学の研究成果とが総動員されるならば，とかく「信頼度の点でそれ自身，根本的な疑念に晒される，カントの講義の学生による筆記録」であっても，「それらは，――「引用の寄せ集め」とか全くの「単語の記録」とかとしてでなく読まれるならば，――講述者〔カント〕の内的な発展ないし外的な位置づけを再構成することが問題である場合には，縦横無尽に活用されてよく」[15]，ひいては各時期にわたるカントの講義内容の一定程度正確な復原にも寄与し得ることを，示すものであろう。実際，グロイナは，「今や第26巻〔の『自然地理学講義』〕は〔第９巻に収められた〕リンクの整えた『自然地理学』の本文を置き換えることになるでしょう」とまで述べている。『人間学講義』に続く『自然地理学講義』のこうした編集過程とその成果[16]こそが，ブラントらからなる当時のBBAWの「カント委員会」[17]に，現行アカデミー版所収の「本文の幾らかを，当該巻のもろもろの不十分さを考慮して新たに改訂することを決定」（IP, 48）するべく促したものと考えられよう。

こうして新編集に付される巻について，2007年の時点でグロイナは次の２件を挙げた：

①第３部門（手書き遺稿）に配置され，「1936年と1938年に第21巻と第22巻として刊行されたいわゆる『オプス・ポストゥムム（*Opus postumum*）』[18]，すなわち，長らく個人蔵であった一連のカント自筆の手稿群」。グロイナによれば，「その大部分が，或る計画された独立の著作のための草稿からなるこの作業原稿は，1999年に，連邦と各州文化財団とツァイト財団（ZEIT-Stiftung Ebelin und Gerd Bucerius）の支援を得て，ベルリン・プロイセン文化財団が取得することができました。ツァイト財団のさらなる資金援助のおかげで2001年には新編集〔の実現〕が近づきました。ドイツ学術振興会は，〔原本の〕保全と電子編集とを目的とする，手書き原稿のデジタル化を資金助成しました。まず，カントの手による詳密な筆記が〔…〕ポツダムの新市場脇（アム・ノイエン・マルクト）に本拠を置くカント作業所で読み取られ翻字（トランスクリビーレン）されます。この作業では，〔現カント委員会の一員でもある〕ジャクリーヌ・カールが，本文の生成という観点に初めて注意を払います。この観点は，〔現行の第21・22巻のとは異なる〕本文草稿の新たな配列へと，したがってそれの新たな理解へと，導くものです。」（IP, 48）その後，（本文作成の前提をなすこの）翻字作業は「10年がかりの作業の末にようやく完了することができ」，2013年末このかた，手稿の写真版と翻字との対照の形で“Online-Edition”[19]が公開される旨が，伝えられた（ZDPh, 29）。

②三批判書（第１部門の第３－５巻）。これらは，『オプス・ポストゥムム』とは異なり，自筆稿（ないし筆記助手による浄書稿）に遡っての再校訂は望めない[20]。それでもなお，事柄として（つまり本文の内容理解の観点から）見て新編集に意味があると考えられるのは，グロイナによれば，まず「第１部門の場合，個々の出版物ごとに指名されていた編者[21]によるこの〔アカデミー〕版の指針の理解が不揃いであった」ためである。具体的には，アカデミー版では「著作部門の通則」（「著作部門への序論」，第１巻，510頁参照）において，「「人物や書き物その他が言及されるか暗示されるいずれの場所でも，理解するために全く不可欠な事実説明を所要の文献指示」の形で与えることが計画されていた」にもかかわらず，「整定された本文の個々の箇所への事項註は求められていたそのことを一部で果していない」のである（IP, 48）。

Ⅲ　アカデミー版『カント全集』の意図とその制約

これは，裏返して言えば，当時の錚々たるカント学者たちが総力を挙げたかに見えるアカデミー版の註釈ではあれ，それが完璧であるわけでも，ましてや異論を許さない唯一絶対の権威的記述であるわけでもない，ということである。この点に関してグロイナは，「（ディルタイによって，さらには彼にならって「精神科学的な基礎」が与えられる以前であって，）今日と比べて貧弱であった20世紀初めの源泉史（Quellengeschichte）の状況」を引き合いに出しつつ，三批判書が属する第１部門の全体に及ぶこの意味での「不徹底」は「常に編者たちのいい加減さのせいにすることができるわけではない」とする（IP, 48f.）。

しかし，つとに指摘されるように，そもそもアカデミー版『カント全集』それ自体が，「1871年のドイツ統一，ドイツ帝国の成立によるドイツのナショナリズムの高揚の中で」「カントを＜ドイツの国民的哲学者＞と見な」す[22]ところに成立したと考えられる。「時代を超越した学問の関心は，「我々の国民意識の育成」に結びつき得るのだ」とされ，「このカント全集は――皇帝（カイザー）にそう理解してもらうことができたように――かくして一個の国家的課題なのだった。」そして，「「手書き原稿として存在する国民的で偉大な財産を維持保存する」よう求める「国民感情」へと」ディルタイは「訴え」た。以上のことは，事業資金を国家から引き出す方便として強調された面があったにせよ，それにしても，「国民を育成

しその連続性を涵養することの価値など，ディルタイには些細なことだったのだ，ということにはもちろんならない。〔…〕件の〔すなわちディルタイ最大の企図である『ドイツ精神史研究』から発展した，「ドイツ民族に己の歴史を通じておのずから自覚を与える」という野心的な〕目論見の意味では，「我々の国民意識の育成」についての言説こそは，ディルタイのもろもろの意図の全く真率な表現なのだった」[23] と言われる通り，アカデミー版『カント全集』が，やはり何よりもドイツの国民意識の形成に寄与しようとしていたことは覆いがたい。とすれば，グロイナの言うように一般に当時の研究水準から事項註が不完全たらざるを得なかった面があることは確かであるにしても，より根本的な次元において，ドイツの国民意識の形成という観点から見て，例えば「不都合な真実」に触れかねないような事項註を付すことは避ける，といった政治的配慮も働いた可能性[24] は，決して否定できないのではないか。

Ⅳ　著作部門の全面再校訂へ

果して，あたかもこうした推測の方向にも呼応するかのように，2014年になって，三批判書にとどまらず，「むしろ，この〔アカデミー〕版の第1部門に集成されている，カントによって公刊された書き物すべて〔=②〕が，批判的な校閲に付されねばならない」とする見解が，BBAWのJ・カール（前出）とカント委員会代表であるV・ゲアハルトとの連名で，『ドイツ哲学雑誌（*Deutsche Zeitschrift für Philosophie*）』に発表された（DZPh, 30）。それによれば，「カントの書き物に即した優に百年に及ぶ釈義的研究は，アカデミー版に収められた本文テキストの無数の訂正（Emendation）を生み出した。それらの訂正を全集の新訂版（Neuauflage）に採用することがかなり以前から求められており，この新訂版によって，全巻を考慮に入れた新たな研究用の廉価版（シュトゥーディエンアウスガーベ）もようやく可能になるはずである。」こうして整定される新たな本文に対応する形で，最新の研究を踏まえた文字通りの事項註，すなわち事実に即した註釈（ザッハリッヘ・アンメルクンゲン）が整備されることが，当然に期待されると言ってよいであろう。

2007年の時点でグロイナは，「新版（Neuausgabe）の目的は，事項註を手立てとして，「歴史的な事柄」を，詳しく言えば本文の個々の諸節の歴史的文脈を，この間に研究が到達した水準で究明することです。さらには，今日ではもはや意味の同じでない言葉遣いは解説されますし，ラテン語あるいはギリシア語の表現も，その意味が脈絡から一義的には見て取りづらい場合には，翻訳されます」と述べていた（IP, 49）。先述のBBAWの「学術企画」は「2010年末に，2022年までの期間延長が認められている。そうこうしているうちに，第1部門のおよそ70編に及ぶ本文の新編集の課題の分担が進められた。」2014年現在，現行の第1巻と第2巻に収録された自然科学と地理学に関する著作と，いわゆる批判期の『自然科学の形而上学的原理』（1786年）を担当する新編者が未定であるほか，19名の新編者が決まり本文の新校訂にあたる運びであると，ゲアハルトらは伝えている（DZPh, 30）。

次に形式面における刷新点は，第一に，「原文に忠実（Originaltreue）という観点」から行われる表記の復原である（“Kritik” に代えてカント自身の用いた “Critik” を表題に採用するなど）。グロイナによれば，第1部門のための統一的な表記の決定は，――現行正書法は範例的基準とはならないとする反対論が部内にあった（エドゥアルト・ツェラー〔Eduard Zeller〕[25]）にもかかわらず――アカデミー版発足「当時の標準規格化に合わせる形で，1880年から1900年にかけてのプロイセンの学校正書法の規則に従ってなされた」ものだったからである（IP, 49f.）。つまり，「ツェラーは「言語的には今となっては半ば過ぎ去ったあの時代の慣習」を「隅々まで顧慮して」保存すること〔全集第1巻，512頁〕に，言い換えれば原文に忠実であることに，賛成だったのです。この原則はもろもろの歴史的批判版の諸基準に見合うものであり，したがって三批判書の新編集にも適合します。さらに，ここ百年に及ぶカント文献学の諸知見が顧慮されるわけですから，国際的な研究者共同体（Forschergemeinschaft）は，新編集版によって，今日通用している本文批判の諸基準に従って作成された基盤を，依拠すべきものとして存分に使えるようになるのです」とグロイナは続けている（IP, 50）。

第二の形式的変更は，受容のグローバル化への対応と考えられる。すなわち，「アングロ・サクソン圏やとりわけアジア圏の多くの読者にとっての重大な障碍」だという「ドイツ文字」の第1部門での使用の見合わせを，ゲアハルトらは示唆している（DZPh, 30）。もっとも，エルンスト・カッシーラー（Ernst Cassirer, 1874-1945）の総指揮により，アカデミー版『カント全集』とほぼ同時期（1912-1922）にドイツで刊行され，その競合版という側面も有するいわゆるカッシーラー版『カント著作集（*Immanuel Kants Werke*）』は，すでにラテン文字で印刷されていた。さらに，18世紀に公刊されたカントの原著は当然ながらドイツ文字で印刷されてい

ただけに，皮肉なことに，ラテン文字の採用は「原文に忠実」たらんとする新編集版の方針と齟齬するようにも見える。「カントの著作にデジタル方式で関わることを容易にする世界規模で利用可能な電子版」(DZPh, 30) の実現を大義名分に掲げての多分に戦略的な判断とは言え，このドイツ文字からラテン文字への移行ということが，21世紀になって「国際的に分担組織された専門委員会」(DZPh, 28) を擁する新編集版でようやく日の目を見つつあるという事実は，当初ディルタイが抱いていたとみられるドイツの「国民意識の育成」という根本意図の，言わば呪縛の強さを改めて考えさせるとも言えるかもしれない。

第三の形式的変更は本文頁の組み方の変更であるが，文献学的註解や校訂事項や異読が現行のように巻末註でなく，脚註として配置されるといった新機軸は，しかし今や珍しくない。事項註はと言えば，現行同様，本文の後に置かれるとのことである。(IP, 50)

グロイナがとりわけ詳細に触れるのは，2007年当時みずから新編集を担当（2010年末まで。2014年初よりD・ハイデマンらに交代[5]）していた『純粋理性批判（*Critik der reinen Vernunft*)』に関してである。現行アカデミー版は，B版（1787年）の本文を完全に，A版（1781年）の本文はB版と異なる部分のみを言わば付録として，それぞれ収録することで，「『純粋理性批判』をB版の形で受容するという後発の趨勢に本質的に貢献した」のであったが，新編集版では，書き換えられた部分については「二つのテキスト（Fassung）が本の見開き頁に並行して組まれる」ことになる。「編集上，二つの版（Auflage）が平等に扱われることで，A版が或る程度復権されるのです」とグロイナは解説し，両版を一目で比較できる組み方により「今まであまりにも顧慮されてこなかった」「カントの仕事の仕方」が「視野に入ってくるでしょう」と，新編集の意義を強調したものであった (IP, 50f.)。

V　新世紀にアカデミー版『カント全集』を更新する意義

もっとも，このレイアウトは，グロイナの説明による限りでは，マイナー社のいわゆる哲学文庫（Felix Meiners Philosophische Bibliothek）に最近まで収められ普及していたライムント・シュミット（Raymund Schmidt）編『純粋理性批判』（第37a巻）のそれを，ほぼ踏襲するものとも想像される。おそらく眼目は，いずれかの版を正典化することを避け各版それぞれの特性を同等に呈示しようとしたこの哲学文庫旧版における編集の方向性[26]をいっそう徹底させるところにあるものと考えられる。と言うのも，グロイナは，「〔…〕「この著作の最初のテキストの歴史的意味と自立した価値」（第1巻，509頁）を承認するのであればなおのこと，「同時に」二つの版を「明晰かつ手軽に見て取り」たいという願望はやはり残り続けました。担当編者のベンノ・エルトマンは，別のところでこの試みを企てており，後になっても，内外の諸編集版は，〔書き換えられた〕各節を並置するように意を用いたのです」と従来の試みを概括しつつ，「それでもやはり，「同時に」二つの版を「明晰かつ手軽に見て取る」という意味での対比は，これまでのところなされていません」と査定し，「このことは，アカデミー版の枠内でなされる新編集で，二つのテキストが本の見開き頁に並行して組まれることによって，言わば遅まきに達成されるのです」と，今次の試みを位置づけているからである (IP, 50f.)。

この事例から窺えるように，当初「W・ディルタイによって，比較し得るもろもろの編集版にとっての「規範版（Musterausgabe)」として計画された」(DZPh, 28) アカデミー版は，1世紀以上を閲した今や，さながら自己の外部の先例を規範として仰ぎこれを取り入れることで，自己の規範性を維持し得るかのようである。思えば，「原文に忠実」という目標にしても，すでに半世紀前に，ヴィルヘルム・ヴァイシェーデル（Wilhelm Weischedel）編によるカント著作集（Werke in sechs Bänden. 現在はズーアカンプ社版）が注意を払っていた。老舗となったアカデミー版ではあるが，それは21世紀の今日では，この間に種々刊行されてきたカントの校訂テキストの長所を集約して体現すべき位置に，言わば押し出されたわけである。

このことを強く意識しているのは，あるいは，現在のカント委員会を束ねているV・ゲアハルトであるかもしれない。と言うのは，彼は，前述の①・②・②′のそれぞれの新編集に加えて，「ここ数十年に新たに見出されたカントによるテキスト」，すなわち，

③20世紀末になってポーランド領グダンスクにて新たに伝存が確認されたが未公刊の，バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-1762) 著『形而上学』第3版（1750年）——カントがその余白に書き込んだメモとともに本文が現行第17巻に収録されている同書第4版とは異なる——のカント手沢本[27]や，

④（第2部門全体の再編を同時に迫りもする，）「全集に編入されると1ないし2巻を占めるであろう」量の，1955年以来発掘された書簡ならびに大学行政に関わる公

的書簡や，
⑤『自然地理学講義』の編集過程で浮上してきた，「カント研究とヘルダー研究の双方にとって本質的な意味をもつ，ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744-1803）による〔カントの〕講義の筆記録全部を収録した独立の1巻」や，
⑥このたび①から分離される「他の著作のための準備作業や，書簡の腹案の下書きや，日常の備忘筆記」を新たに収める第3部門の最終巻，それに
⑦「全巻を包括する索引巻」，
以上を遺漏なく刊行した暁に，アカデミー版『カント全集』はようやく完結すると考えるのであるが（DZPh, 30f.），このように「意義ある文化遺産を保存し解明し目のあたりに示すという目標を，ドイツのカント研究であれば無思慮に放棄していたことであろう」（DZPh, 30）と述べて，今後のアカデミー版『カント全集』の事業は，ドイツにおける以外の研究成果をも摂取すべく，（グロイナの言う）「国際的な研究者の共同作業（Forschergemeinschaft）」に接続することによってこそ，実を挙げ得るであろうことを暗示しているからである。
①の新編集に，目下進行中のいわゆるケンブリッジ版英訳カント著作集の枠内で注目すべき成果を挙げた[28]，以前のカント委員会の一員で米国で活動するエッカルト・フェルスター（Eckart Förster）が編者として携わっている（IP, 48; ZDPh, 29）のは，そのことの好例とみられる。

当代におけるニーチェ（Friedrich Nietzsche, 1844-1900）研究の第一人者でもあるゲアハルトの念頭には，1934年に刊行開始されたニーチェの「歴史的批判版」全集が，今日ではよく知られている編纂作業上きわめて困難な事情[29]に直面せざるを得ず，第二次世界大戦中に途絶を余儀なくされ，戦後になって新たに，「精緻な原典校訂に基づく網羅的な決定版ニーチェ全集」の編集が2人のイタリア人研究者に委ねられ，進捗した事実（いわゆるグロイター版全集）[30]があったかと忖度するとすれば，これは穿ちすぎであろうか。

おわりに

ゲアハルトらは，「2015年よりも前に」三批判書の新編集が刊行可能になることはないだろうと見通していた（DZPh, 29.『実践理性批判』はイェンス・ティマーマン〔Jens Timmermann〕，『判断力批判』はアンドレア・エッサー〔Andrea Marlen Esser〕が担当）。その後，2014年11月に発表されたBBAWの報道資料は，カント生誕300年にあたる2024年に向けての10年間を「カントの10年（Kant-Dekade）」の名でアピールしようという提案がドイツ連邦議会の超党派の議員協会のメンバーによりなされ，BBAWはこれを歓迎したこととともに，『オプス・ポストゥムム』の新編集が2018年には完成しているはずであること，さらに「カントの10年の終わりには，カントの仕事すべての参照基準（レファレンツ）となる，現代の要請に応える編集版が出現するであろう」ことを，伝えた[31]。

最後に，今後も引き続き動向を注視する必要があることに加え，カントの言う「世界市民的意味における哲学」（vgl. $XXVIII_{2\cdot1}$ 533）の成否は，むしろ，完結後の新たなアカデミー版『カント全集』の活用如何にこそかかっていることを確認し，本稿を閉じたい。

【註】

＊ 本稿は，大東文化大学国際比較政治研究所2015年度第3回研究会（2015年7月22日，於大東文化大学板橋校舎）およびカント研究会第293回例会（2015年10月25日，題目は「アカデミー版『カント全集』をめぐる話題」，於法政大学大学院棟）にて報告した際の原稿に修正を加えたものである。『純粋理性批判』は初版をA，第2版をBと記す。他のカント文献はアカデミー版の巻数をローマ数字，頁数をアラビア数字で併記して出典箇所を示す。丸い傍点は原著者による強調を示す。〔　〕は引用者による。以下で言及したURLは2016年7月30日に確認した。

1）W.Stark: “Die Kant-Ausgabe der Berliner Akademie – Eine Musterausgabe?”, in: D.Emundts (Hg.): *Immanuel Kant und die Berliner Aufklärung*, Wiesbaden 2000, 219.

2）本全集の編成内容を解説した包括的な文献としては，邦語では，佐藤俊二「アカデミー版カント全集収録作品リスト」（弘文堂版『カント事典』1997年，611-625頁）があった。これは，「本事典刊行直前の97年秋」に刊行された当時最新の第25巻の「詳細は他日を期したい」とした1997年（上半期か）現在の記述である。本事典の「縮刷版」が2014年に刊行されたが上記リストを含む巻末の「付篇」と「付録」は省略された。英語ではスティーヴ・ナラゴン（Steve Naragon）による次のウェブサイトが詳しい。http://users.manchester.edu/FacStaff/SSNaragon/Kant/helps/AcadEd.htm

3）この機関の呼称には変遷がみられる。1700年の創設時は，ブランデンブルク選帝侯立諸学協会（Akademie ではなくSocietät. 初代会長ライプニッツ），アカデミー

版『カント全集』刊行開始時はプロイセン王立学術アカデミー，第一次世界大戦後に王立でなくなり，第二次世界大戦後は東ベルリンに位置したためDDRのドイツ学術アカデミー，東西両ドイツ統合後にベルリン＝ブランデンブルク学術アカデミーとして再出発し現在に至る（vgl. auch http://www.bbaw.de/die-akademie/akademiegeschichte）。本全集関係事業については vgl. http://kant.bbaw.de/（本稿で参照するグロイナ他の情報との重複あり）。

4）R.Brandt u. a.: "Rückblick auf 40 Jahre Philosophie", in: *Information Philosophie*, 2012/3-4, 27f.

5）http://kant.bbaw.de/abteilung-i/die-drei-kritiken/

6）Vgl. V.Gerhardt/J.Karl/A.M.Esser: "Ein großes Werk zum Abschluss bringen", in: *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Bd. 62, H.1, 2014, 34. 以下，当論文の引用に際してはDZPhと略記し頁数を併記して本文中に典拠を示す。

7）"Ausgaben. Kant's Gesammelte Schriften. Die drei Kritiken neu ediert – Fragen an Tanja Gloyna", in: *Information Philosophie*, 2007/4, 46-51. 以下，当記事の引用に際してはIPと略記し頁数を併記して本文中に典拠を示す。

8）とりわけ，「カントの精神的遺産で，これまで未公刊の部分を滅失から守る」ことに関しては，ディルタイの「目論見の正しさは，この上なく痛ましい形で証明された 」（W.G.Jakobs/P.Müller: "Editionen philosophischer Werke der Epoche Kants", in: W.Jaeschke u.a. (Hgg.): *Buchstabe und Geist*, Hamburg 1987, 192）。このことに関しては後出。

9）松山壽一「先入観と理解――若きカントの自然哲学を理解するために」（初出2000年），同『若きカントの力学観――『活力測定考』を理解するために』2004年所収，20頁。

10）より詳しくは次の通り。「部門区分の基準は，当の記録資料の目的が学術的か私的かである（〔全集〕第1巻，X-XV頁）。〔まず，〕書簡の目的は私的，他の資料の目的は学術的とみなされる。さらに後者の場合，著作はカントが認めた公刊物である点で，遺稿と区別され，講義は，もっぱら聴講者の筆記を介してのみカントの言葉が保存されたのだから，もしかすると〔カントの思想としては〕より控えめな正統性しか含まないかもしれないという点で，著作や遺稿とは区別される」（Jacobs/Müller: a.a.O., 193）。「それにしても私的目的と学術的目的という区別は不確かである」ことも事実である（ebd.）。

11）Vgl. ebd., 194.

12）シュタルクによれば，「1987年5月に『カント全集』の作業拠点がゲッティンゲン・アカデミーのカント委員会（Kant-Kommission）によってベルリンからマールブルク大学に移された」（Stark, a.a.O.）。

13）現在BBAWは第4部門の主任（Leiter）としてパウル・メンツァー（Paul Menzer, 1873-1960）を挙げている（http://kant.bbaw.de/die-akademie-ausgabe/abteilung-iv-vorlesungen）。

14）この訳語については，明星聖子「編集文献学の不可能性――訳者解説に代えて」，ピーター・シリングスバーグ（明星聖子・大久保譲・神崎正英訳）『グーテンベルクからグーグルへ――文学テキストのデジタル化と編集文献学』2009年（原著2006年）所収，318-319, 334-335頁を参照のこと。念のため言い添えると，訳者は「編集文献学」は「不可能」だと客観的に断定しているのではなく，その「困難」を指摘している（325頁）。

15）W.Stark: "Rousseau und Kant", in: Ch.Ritzi (Hg.): *Jean-Jacques Rousseaus "Émile"*, Bad Heilbrunn 2014, 182. シュタルクは同所で，『視霊者の夢』（匿名で1766年刊）から『純粋理性批判』（1781年刊）に至る時期のカントに関する情報源となるカントの講義の筆記録について「25年にわたって徹底的に閲読し究め尽くした後〔の今〕では，件の疑念に自分は与しない」と明言している。伝存する諸本を十分比較検討しないまま学生の筆記録だから信用が置けないと性急に断定するのは単なる先入見だということであろう。

16）2014年時点で，『自然地理学講義』は，その第2分冊が増頁のため上下巻に分割される見通しとなり，多分2016年には刊行の見込みと伝えられた（DZPh, 29）。2015年半ばにはシュタルクにより次のウェブサイトが公開された。http://kant.bbaw.de/base.htm/index.htm

17）2016年現在，代表はフォルカー・ゲアハルト（Volker Gerhardt, 独・ベルリン）。委員はマッシモ・フェラーリ（Massimo Ferrari, 伊・トリノ），ディートマール・ハイデマン（Dietmar Heidemann, ルクセンブルク），ジャクリーヌ・カール（Jacqueline Karl, 独・ポツダム），ハイナー・クレンメ（Heiner F. Klemme, 独・ザーレ河畔のハレ），ヴィオレッタ・ヴァイベル（Violetta Waibel, 墺・ヴィーン），エリック・ワトキンス（Eric Watkins, 米・サンディエゴ），マルクス・ヴィラシェック（Marcus Willaschek, 独・マイン河畔のフランクフルト）。Vgl. http://www.bbaw.de/die-akademie/praesidium-und-gremien/kant

18）直訳すると「遺作」だが完成稿ではない。「遺稿」と訳

されることが多いが，いずれにせよ，直ちに二重鍵括弧を付すことは著作との同一視に誘導しかねず問題含みではある。

19) 次のウェブサイトを指すと思われる。http://telota.bbaw.de/kant_op/

20) ただし『実践理性批判』の場合はハレ大学文書室に伝わるカント手沢本が底本として活用される（http://kant.bbaw.de/abteilung-i/die-drei-kritiken/critik-der-practischen-vernunft-handexemplar）。

21) 『純粋理性批判』をベンノ・エルトマン（Benno Erdmann），『実践理性批判』をパウル・ナトルプ（Paul Natorp），『判断力批判』をヴィルヘルム・ヴィンデルバント（Wilhelm Windelband）が，それぞれ編集した。

22) 松山前掲書，26頁。アカデミー版『カント全集』の準備・刊行開始時期が「ヴィルヘルム2世時代（wilhelminisches Zeitalter）」に属する事実には注意が払われてよい。

23) F.Rodi: "Dilthey und die Kant-Ausgabe der Preussischen Akademie der Wissenschaften", in: *Dilthey-Jahrbuch*, Bd.10, 1996, 109f. 当文献の存在は，ヴィルヘルム・ディルタイ／鵜沢和彦訳・解説「『アカデミー版カント全集』前文」（日本ディルタイ協会編『ディルタイ研究』25号，2014年，99-117頁），に教えられた。訳文は拙訳による。

24) 筆者は『永遠平和のために』に即してこの点を指摘したことがある。拙著『カント哲学の射程——啓蒙・平和・共生』2011年，135頁註6の後段を参照のこと。

25) 「新カント学派（Neukantianer）」という語は1862年に彼に向けて揶揄的に使われたのを嚆矢とするという。参照，中公版『哲学の歴史 9——反哲学と世紀末』2007年，395-396頁（大橋容一郎）。

26) これは，伝存する複数の講義筆記録から編者が唯一の決定版本文を作成することを避け，各講義録の本文を基本的にその都度翻刻している『人間学講義』・『自然地理学講義』の編集態度——言わば「資料をいかに忠実に，ありのままに出すか」（明星聖子「序　編集文献学とは何か」viii頁，明星聖子・納富信留編『テクストとは何か——編集文献学入門』2015年，所収）の追求——にも通底するであろう。

27) Vgl. W.Stark: "Kant und Baumgarten: Exemplare der *Metaphysica*", in: *Editio*, Bd.27, 2013, 99f.

28) Cf. M.Kuehn: *Kant. A Biography*, Cambridge 2001, 410.

29) ニーチェの妹による書簡の偽造・捏造，ならびに，「一〇六七箇の断片が，その成立時期や脈絡を度外視して，体系的と称する仕方で配置され順序づけられ，あたかもニーチェみずから明確に構想した著作であるかのごとき体裁をよそおって，理論的主著『権力への意志』という遺稿集」が作り上げられていた事実（渡邊二郎・西尾幹二編『ニーチェを知る事典——その深淵と多面的世界』2013年〔1980年初刊を改題〕，193-194頁〔渡邊二郎〕）。後者の事例は，2014年時点で作業中と伝えられた『オプス・ポストゥムム』の本文整定（ZDPh, 29）にあたり，細心の注意が求められることを示唆し得る，と言えよう。

30) 渡邊・西尾編前掲書，168-179頁（渡邊二郎）。さらに，近年に至るグロイター版全集の推移に関して，明星・納富編前掲書，206-207頁（トーマス・ペーカー〔矢羽々崇訳〕）。

31) http://www.bbaw.de/presse/pressemitteilungen/PDFs/PM_22_Kant-Dekade.pdf